

◆主張、遊びの先輩登場、学生の気持ち2面

◆写真グラフ3面

◆参加者の声、宮城大からのメッセージ、私の視点4面

# 薫風・満天塾に歓声響く

## 大潟村は遊びのフィールド

●「雪まつり」(二月)  
●「春を見つけよう」(三月)

遊びを通して「人間力」を高めようを狙いとした「薫風・満天フィールド交流塾」は二月十六日、秋田県大潟村の県立大学フィールド教育研究センターを会場に「雪まつり」を繰り広げた。引き続き三月にも、十八日に「フィールドセンターで作った食材を活用したお菓子作り」、二十五日は遊びの範囲を村内に広げ「春を見つけよう」をテーマにした活動メニューを相次いで展開した。文部科学省の「新たな社会的ニーズの対応した学生支援プログラム」(平成十九年度)に選ばれた交流塾は、四月から二年度に入り、活動はいよいよ本格化する。



大潟村のでっかい大地とちっぽけな僕

### ●雪まつりに宮城大生

雪まつりには学生、教職員ら合わせて六十人近くが参加し、かまくら作りやクロスカントリースキー、かんじき歩きなどを楽しんだほか、自分たちが作った薫製を味わい、男鹿半島の郷土料理「石焼き料理」を堪能した。

他大学として初めて、宮城大の学生も駆けつけ、会場は終日、歓声であふれた。三月十八日は、ニンジンケーキなど手作りの味を試した。二十五日の学生企画「春を見つけよう」では、大潟村のソーラーズポーツラインをロードバイクで、水路をボートで散策。

天体望遠鏡を使つての夜空観測などもあり、多彩なメニューをこなした。

### ●遊びで「人間力」

交流塾は、平成十九年度の文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」の一つに選ばれた。

遊びや農山漁村地域の人の交流などを通して、学生の人間の成長の後押しをする取り組み。大潟村という厳しい自然の春夏秋冬と、そこで幅広く営まれる農業は、「遊び」を発想する格好の対象となる。そこを拠点として、学生の「見る」「体験する」「交流する」

「考える」「行動する」意欲をかきたてたいと考えた。

### ●初年度は八企画

「活動メニューの立案」「拠点施設、機材の整備」の年にあたる交流塾の初年度は、八つの企画を体験したことになる。

秋田の食文化を知る「ハタハタ満喫」に始まり、「ハタハタ寿司(飯ずし)製造」、アイスキャンドル作り、キリタンポ作り、比内地鶏の薫製とベーコン作りを体験。二、三月の企画へとつながった。



たんぽぼ作りに挑戦!

### ●全国で七十件選定

学生支援プログラム(GP)に申請したのは全国で二百七十二件(大学二百七、短期大学二十九、高等専門学校三十六)で、そのうち七十件が選定された。交流塾は学生の遊びを支援するというユニークさが注目された。



ケーキ作りに挑戦!

文部科学省が昨年、学生を対象にした新事業を始めた「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」。人間力を高め、創造力と行動力豊かな社会人を養成することを目的とした大学、短大、高専の企画に、年間で最大二千五百万円を交付するという内容だ。二昔も前なら、余計なお世話だと、当の学生たちからそっぽを向かれたに違いない。しかし今は、共通の問題意識があるようだ。全国二百七十二校から応募があり、そのうち七十校の提案が採用された▼最もユニークと注目されるのが秋田県立大(秋田市など)の「薫風・満天フィールド交流塾が育む人間力一遊びと農業の教育力が若者と社会を結ぶ」だ。大潟村のキャンパスを主舞台に、さまざまな「遊び」を通じて、創造力や社会性を身に付けてもらうという▼昨年末に、ハタハタの水揚げなどを見学し、しよつる鍋をつくる「ハタハタ満喫体験」から活動がスタート。最も寒さが厳しい二月半ばには、かまくらづくりとスノーモービル体験、薫製と石焼き料理を味わう「雪まつり」があった▼合わせて五十人の学生と教員が雪とたわむれた会場は、まるで小学校か中学校の校庭のよう。だが、学生たちはそれぞれ「遊び」の意義を見いだそうとしていた。「教室の外に出ると、いろんなものが目に入ってきて新鮮」「こういう機会からも将来の進路につながる何かが見つかるかもしれない」▼活動によっては学生よりも教員の参加が多いなど、需給の不均衡もあるようだが、人間力豊かな先輩に受けているのは確か。春からは山菜採りや発酵食品づくり、農家との交流など盛りだくさんの「遊び」が予定される。そこでどれだけ人間力が高められるか。塾の歩みに目を凝らしたい。

## 薫風抄

## 交流塾の将来

### 特別寄稿

私の講義でのことですが、交流塾の活動に参加した学生の何人かに受講態度の変化が見られました。目の輝きが参加の前後で違うのです(二人)。いつも寝ていた学生は参加する度に少しずつ変わり、今では最後まで聞くようになりました(こちらは一人)。

この話を塾運営のほかの先生に話しても、とりあつてくれません。「偶然じゃない?」と。

しかし、そうでしょうか。先日、秋田県立大学で開かれた講演会で、前弘前大の副学長の大関邦夫さんは「講義外で付き合い、教員という立場を離れた姿を見せると、学生の講義や教員への意識が変わると期待できる」と強調していました。



薫風・満天フィールド交流塾 塾長 露崎 浩

確かに「感性」「挑戦心」「行動力」を評価するのは容易ではないでしょう。それでも、いろいろな手法を

学び、活用して学生の諸能力を伸ばすことで、さらなる人間力の向上に生かしたいと考えています。「偶然じゃない」証として、平成二十年度「活動メニュー(案)」を見ることもできます。学生の期待が伝わってくるのです。私たちは、これらのメニューをこなす延長上に、幾つかのサークルの誕生を思い描きます。例えば「先

進的あるいは社会のニーズに応じた農業に取り組み、農家と作業等を共にする」サークル、あるいは「自然を楽しむことで、自然の大切さを社会に発信する」サークル、「伝統的な食および現代における食生活の在り方に取り組む」サークルなどです。

これらのサークルが主体となって、交流塾まつりやワクワクしてくるのです。開催する。活動成果を広く伝えることで、地域住民・社会との交流が深く進んでいく。どうですか? 実現しそうです。私は今、とても



第1回大学間交流

「遊び」が予定される。そこでどれだけ人間力が高められるか。塾の歩みに目を凝らしたい。

(河北新報記者・渡辺雅昭)

# 主張

## 発行にあたって

新聞はニュースを伝えるためのメディアの一種です。もちろん、この「薫風満天新聞」も同じ役割を担おうと張り切っています。

「薫風・満天フィールド交流塾」に限っての活動になります。そこで何が行われたのかを詳しく報告し、生き生きとした仲間の表情を広く知らせていくつもりです。

現代にメディアは幾種類もあります。その中で新聞は「古い」位置に存在するでしょう。実際、交流塾の活動の様子は映像、ホームページ等でも伝えられていきます。

それでは私たちはなぜ、新聞にこだわるのか、です。第一にその記録性です。

交流塾の活動出来るだけ多く取り上げ、記録し続けることで、活動をどう広げていくか、どのように深めていくかのテーマに寄り添うことができると思います。そのためにも常に問題意識を持って取材、執筆に当たります。

### 発行人

伊藤 さゆり  
齊藤 東加

次に議論の場です。新聞は一方通行のメディアではありません。この紙面を通してみんなで考えを深め合うのです。そしてこの新聞を見た読者を、新たな塾生として巻き込み、交流塾をよりポジティブかつアグレッシブにしていきたいと考えています。

とはいえ、新聞部とはいつても、新聞部と

して動き始めて間もないため、まだまだ不慣れで十分どころがあります。

みなさん、薫風・満天フィールド交流塾とともに、「心の躍動を伝える新聞」を基本姿勢に据え、薫風満天新聞をよろしくお願ひします。

最後になりましたが、この創刊一号を発刊するに当たり、原稿をお寄せ頂いた露崎浩塾長、レイアウトを考えて下さった濱野美夫先生、インタビュをお願ひした永吉武志先生、薫風抄を引き受けてくれた河北新報記者渡辺雅昭さん、宮城大学自然研究部の齋藤千夏さん、県立大学の仲間のみんな、編集全般をみてくれた寮監の土井敏秀さん、ご協力どうもありがとうございます。無事にこの記念すべき第一号を発刊することができました。心からお礼申し上げます。

## 「遊びの先輩 登場！」

雪まつり会場でスノーモービルの操作方法を教えた

永吉武志さん (37)

(アグリビジネス学科生産環境管理学科准教授)

「このスノーモービル、いいですね。」

「バイクのタイプで言えば五〇〇ccクラス。レーシングバイクに似ている。乗ってみると分かるけど、ハンドルは簡単に切れない。これもバイクと同じ。うまく体重を乗せて、体を倒しながらハンドルを切るのがコツ。見た目のカッコ良さは過信できない。意外にスタック(雪の中に埋もれてしまう)しやすいんだ。でもバイクに乗った経験があれば、乗りこなせるよ。」

「塾の薫風満天にぴったりの青。どこまでも続く青空のイメージだね。塾だけでなく冬場の水田調査にも使えらると思う。」

「まつり会場で接した学生の姿で、これまで授業で見たのと違う」と感じたことはありましたか？

「塾を通して、学生が大学の講義の在り方まで変える。こんな新しい発想が飛び出してくるのが、遊びの柔軟さだし強さだろう。満天に次々と星が輝いてくるのを待とう。」

### 学生の気持ち

アグリビジネス学科二年 齊藤 東加

この塾にはさまざまな、至れり尽せりのプログラムが用意されています。参加すると、行く先々で歓迎されているそうです。

うれしいはずなのに、けど私は立ち止まったまま。興味はあるのだけれど、なんとなくしっくりこない。これって本当に自分がやりたいことなのだろうか？ そう考えてしまっているの



スノーモービルに乗り、勇姿を披露する永吉先生

「授業中はおとなしい学 生が大声ではしゃいだり、あるいはリーダーシップを発揮したりするといった、意外な面を見ることが出来ました。」

「この塾を通して、学生にどんなことを知って、感じて、分かってほしいですか？」

「最近の学生は、みんなで話し合ったり協力して遊ぶ経験が少ないと思うので、みんなでやる遊びの面白さや楽しさ、また、自然の中の遊びにある多少の危険性(ハザードではなくリスク)みたいなものも、感じとってほしいです。」

「講義を通して伝えたいこと、遊びを通して伝えたいことの違いってありますか？」

「授業(特に座学)では、教員と学生の距離が一定に離れ、教員が学生に一方的に「教える」という形態になることが多いと思います。遊びでは近い距離で相互に「学ぶ」という形態になることが多いです。内容によっては、教員と学生の立場が逆転することもあるんですね。これが楽しい。それと感性や人間性って。〇〇学」などの講義科目で学ぶよりも、遊びの場で学ぶことのほうが多いんじゃないかなあ。」

「教えてもらわないと、遊べない学生がいることを、どう見ておられますか？」

「私自身も親や先生、学校の先輩に遊びを教わってきたので、遊びを教え伝えることについて、それほど違和感はありません。ただはやめてほしいな。私はそう言いたい。」

「今の学生って何にも知らないのね」。そう言われるのには、もちろんちゃんとした理由があるのは分かるのだけれど、「そこまでするって、家の中でテレビを見、ゲーム機を操るしかない子供時代だったの？ 違うよ。そんな思いこみでも参加した友達の話を

し、教えてもらわないと遊べない学生が少なからずいることについては、若干の危機感を覚えます。」

「この塾でこれから、どんな遊びを伝えていきたいですか？」

「きちんと言うっておきたいのは、この塾は学生が主役の塾だ、ってことです。教職員は、黒子」です。学生の要望があれば、できる限り対応したいと思っています。えっ？ 私が遊びたいことですか？ 黒子って言ったばかりなのに…あなたもいじわるですね(笑)。今、興味があるのは伝承遊びです。」

聞いて納得できたことがあります。この塾に参加すると、さまざまなジャンルの、いろいろな生き方をしている人たちに会えるのですね。

多分みんな「いいこ」じゃなかった人ばかり。そんな気がしています。なんとなくですけど。

だから次は、ぜひ参加しようと思います。最初は先生たちが作ってくれたプログラムに乗ってのけど、変わるよ、私たち！

【解説】平成一九年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」の申請・選定件数を表にした。

選定されたプログラムを見ると「遊び」の二文字が入ったテーマは、秋田県立大学の「薫風・満天フィールド交流塾」しかない。それだけに注目度は、全国区」となる。

今後、メニユーをひとつひとつこなすことで、学生が自分たちの企画力をどう高めていくか。ほかの大学をどう巻き込んでいくか、まで問われることになる。

塾に参加している学生の一人が、面白いことを言っていた。「いろいろな遊び

平成19年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」申請・選定件数

区分		国立	公立	私立	合計
大学	申請件数	74	19	114	207
	選定件数	21	6	21	48
短期大学	申請件数	—	1	28	29
	選定件数	—	0	11	11
高等専門学校	申請件数	36	0	0	36
	選定件数	11	—	—	11
合計	申請件数	110	20	142	272
	選定件数	32	6	32	70



塾を通して、学生が大学の講義の在り方まで変える。こんな新しい発想が飛び出してくるのが、遊びの柔軟さだし強さだろう。満天に次々と星が輝いてくるのを待とう。」



# 写真グラフ



## 「雪景色には笑顔がよく似合う」

2月16日に開かれた雪まつり会場で、とびっきりの表情を追うと、そんなせりふが浮かんだ。だから雪国暮らしはやめられない？会場を紙上で「再現」すると、みんなの歓声が弾け飛んでくる。



石は1000度。熱くても、カメラは近づかねばなりません

石焼き料理の名人の技に見とれる

◆夏までの企画情報(予定)

四月からの新年度は、新入生歓迎イベントをはじめ、さらに充実した「遊びの企画」が繰り広げられる。具体的に決まったもの、まだ案の段階のものが混在しているが、数多くのメニューが、実現に向けて動き出している。とりあえず、夏までに予定されている内容の一部を挙げる。

これなら参加したい、内容の充実を図るためにこんな提案をしたい、という気持ちを高めてほしい。塾はみんなを待っている。

- 村づくり 交流塾の拠点づくり(長期計画)
- 山菜採り 男鹿市・真山周辺での「ネマガリダケ」採り、五月中旬。
- 釣り 溪流、湖水、海、いずれも、随時。
- 山歩き 六月下旬に予定されている、男鹿の「お山かけ」(五社堂―真山神社)に参加。
- 天体観測 フィールド教育研究センター、随時。
- いかだ、カヌー乗り 雄物川の川下りに参加、七月下旬の予定。
- ロッククライミング秋田県スポーツ科学センター(秋田市八橋)で山岳連盟の指導を受ける。随時。

○たい肥、野菜、バイオエタノールづくり 随時。

○乳製品、発酵食品、漬物づくり、各種料理教室 随時。

○キャンプと世界各地の打楽器ライブ 八月九、十日。男鹿市・加茂青砂の旧加茂青砂小学校とその周辺が会場。磯遊び、地元の人たちとの交流、アフリカの太鼓「ジャンベ」のワークショップなど。十日は、なまはげ郷神楽(創作太鼓)、藤原兄弟(和太鼓と篠笛)、しえぎしえぎ(アフリカの太鼓、オーストラリアの先住民の管楽器など)の競演ライブを楽しむ。彼らの演奏に合わせて盆踊りも。

○夏まつり フィールド教育研究センターを会場に気球体験などさまざまなイベントを楽しむ。八月下旬。

ほかにもさまざまな企画が計画されているが、「ぜひこれをしてみたい」という要望は大歓迎。詳しい問い合わせと「塾生」の申し込みは、薫風・満天フィールド交流塾学生支援GP事務局【電0185(45)3211】へ。





「これからもよろしく!」。宮城大生のお得意ポーズ

## 「サークル交流に発展を」

### 宮城大生がメッセージ

交流塾に初めて他大学として参加したのは、宮城大(仙台市)の自然研究部のメンバー五人。雪まつりを一緒に楽しただけでなく、交流会では研究部の活動内容の報告もあった。代表の齋藤千夏さん(二年)は参加した感想を本紙に寄せてくれた。

こんにちは。宮城大自然研究部です。この前は雪まつりにお招きいただきありがとうございました。仙台は雪が降っても年に一、二回。しかも二、三日で溶けてなくなってしまうので、雪と遊ぶという機会がありませんでした。なので今回の雪まつりでの大きなかまくら作り、広い場所でのスノーモービル、クロスカントリース

キーなどは、どれもこれも初めての経験で本当に楽しかったです。氷上のワカサギ釣りは釣れなかつたけど、楽しめました。大瀧村に来たのは初めてです。こんなに広大で真っ平ら、しかも一面の雪景色という光景は今まで見たことがなく、本当に感動的でした。二日目の朝(二月十六日)の朝に、今西先生に少し村内を案内していた

いただきました。いろいろなことを教えていただきました。大瀧富士の内部構造の秘密は最高ですね(笑)。私たち自然研究部は昨年、キャンパス内の動植物探しを行い、イナゴの佃煮も作ってみました。今回の交流では、「かんかん」と「草っこ」のみなさんと意見交換をさせていただきました。秋田県立大学のサークルは地域交流、



かまくらのなかでアイスクャンドル。

## 弾む 塾参加者の想い



もう少しでかまくら完成。「雪って結構重いね」

### 参加者の声

◆「雪の少ないところで育ったので、雪遊びがなんでも楽しい。学生生活は勉強だけじゃないと思う。きょうは石焼きを初めて味わって、うん、おいしかった。ひとりではできないこと、みんなと一緒にできることに参加していきたい」(二年池田知子さん)

◆「大学の授業は高校時代とあまり変わらない。あくまでも受け身だから。でもこうして外に出て、いろんな体験をすると、自分で調べてみようと思うことに出会う。これからの進路探しにも役立つように思う」(二年横山咲さん)

◆「塾ではどぶろく造りをぜひやりたい。醸造を勉強していくので」(一年市川明彦さん、楚南盛世さん)

◆「発酵食品に関心があるので、塾でもやってほしい」(一年野澤英二さん)

◆「勉強では学べないことができるのが魅力かな。新しい友達もできるし、あ、あの人も私と同じ趣味なんだ、と分かるのもうれしい。外部の人たちとの出会いもすごいプラスになっている。今しかできないことにこれからも挑戦していきたい」(二年花田真美さん)

◆「外で思いっきり遊ぶ。みんなで料理する一ふだんの勉強ではできないことがやれるのがいい。ほかの大学、地域でさまざまな活動をしている人たちなど、範囲を広げられればうれしい」(二年見上歩さん)

◆「先生と友達に誘われて参加した。こういうグダグダした感じは大学に入ってからなかったの心地よい。塾ではいろんなことができそうなので、期待している」(一年佐々木亮太さん)

### 私の視点

雪まつりの会場で、一羽の野鳥が話題をさらった。木の枝に片方の足の鉤爪を引っかけて、外せなかつたのだらう、ぶら下がったまま死んでいた。

体長四〇センチほどのトラフズク(フクロウ科)【注】。学生のだけ一人、本物を間近で見えたことはない。駆け寄っては、興味深いのぞき込んだ。茶色、白、黒の混じり合った模様が渋い。

大瀧村の空を飛び回っていたら、小さく



冷たいトラフズクを手に言葉なし

折り畳まれていた。大地を広く見渡していたはずの首は、力なくうなだれていた。大瀧村には約二百種の野鳥が生息している、と言わ

れている。皮肉にも私たちは「死」を通して、その環境の豊かさを知った。

薫風の空に舞うトラフズクにいつ出会えるだろう。その日を楽しみに、レンズを磨いている。

(伊藤さゆり)

【注】トラフズク 頭にウサギの耳のような羽角を持つフクロウの仲間。大瀧村の松林で繁殖することが知られている(大瀧村あきたこまち生産者協会HPから)。

### 部員募集

薫風満天新聞部では、一緒に新聞作りを楽しむ仲間を募集しています。

資格は、あちこち飛び回って、いろんな話を聞きたい、するとその感動を多くの人に伝えたい、そんな熱意を持っていることだけです。

活動は、文章を書いたり、写真を撮ったり、レイアウトを考えたりと、これから役に立つことばかり。

さあ、次回の第2号は、君と一緒に!

新聞部加入の申し込みは薫風満天ワールド交流塾学生支援GP事務局【電0185(45)3211】へ。